

## 〈巻頭言〉

# 人の支配を打ち破る神の国の民として生きる

古賀 清敬

相次ぐ風水害、震災や原発事故のために多くの人が困難な生活を余儀なくされている一方で、東京オリンピックに係る建設ラッシュやそれに伴う労働者不足、コスト上昇が災害復興の足かせとなっている事態がある。それにもかかわらず東京都が膨大な財政支出・余剰金備蓄を行っていることは、正義と公正に反する不道徳きわまりないことである。全国から利益と人材を搾取している東京・横浜一極権力集中こそ現代のバベルの塔であり、労働者の過労死、非正規労働者の人権侵害、人口減少（\*過去40数年婚姻率最高にして出生率最低、それなのに乳幼児(転入)人口は上昇）の温床となっている現実を直視しなければならない。被災者や困窮者の恨みを買う「復興妨害五輪」にならないよう警鐘を鳴らし続けたい。

今年度も昨年に続けて沖縄に行き、「辺野古抗議ツアー」を行った。これは、全国から1000人もの機動隊員を動員しての高江ヘリパッド基地建設強行、また辺野古新基地建設への埋め立て強行という、沖縄住民の意思を無視し、暴力的に排除した強引な安倍政権のやり方を座視しては行かないという事情からである。なおいつそう自分の問題として、日本の基地をめぐる人権と平和の問題として、沖縄の現実と向き合っていく責任を痛感する。

また、福島被災地も再訪問したが、今後も人権に関する神学的研究と実践との双方を大事にしながら活動し、それをふまえた情報発信と共有とをめざしていきたい。なぜなら、単に情報を集めて発信するだけなら、言葉の身体性と責任性を欠落させてしまい、現場の当事者を頭ごなしにした論評や、自分の主体性を置き去りにした態度に転落してしまうからである。

日本軍「慰安婦」問題は、韓国の新政権誕生によって、新たな局面を迎えている。政治的思惑に左右されることなく、被害当事者の思いを中心にすえた適切な解決のため日本政府も韓国内政問題として静観する姿勢に固執するのではなく、一歩進めて“真実の和解”に向けた努力をすべきであ

ると考える。また、この件で「嫌韓」感情を煽られないように、教会はあくまで歴史的正義と公正とを語り、日本人が自民族中心主義から解放されるよう祈る課題があると考えている。なによりも日本の首相自身が誠実に被害者たちに向けた、心から赦しを乞う象徴的行為が必要であることは明言しておきたい。

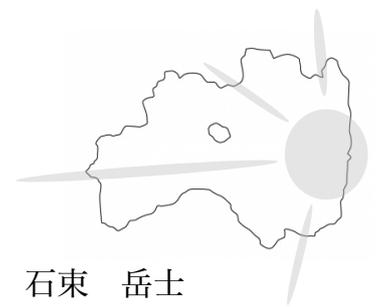
2015年に第3回「マイノリティー問題と宣教」国際会議が開かれ、この会議で合意された「マイノリティー宣教センター」が2017年4月に開設された。被差別少数者の当事者を中心とした国内外の人権問題に取り組む幅広い連携と協働が進められるよう願っている。

昨今、高等教育の無償化が論議されているが、朝鮮学校だけがいまだに高校無償化（就学支援金）から排除され続けている事実をそのままにしてはならない。拉致問題やミサイル・核問題を理由とした政治的対応と、子どもたちがその出自を尊重した教育を等しく受ける権利とはあくまで別問題であることを明確に認識すべきであろう。国連人権関連委員会から明確に差別であると指摘され改善を勧告されている事実を安倍政権は無視し続けているが、無償化を求める裁判にいつそう注目し、支援の輪を広げる必要がある。

日本社会はいまや外国からの移住労働者を抜きには成り立たない。新たな技能実習生制度が今年の11月から実施されようとしているが、彼らをたんに労働力としてだけでなく、人としての尊厳と権利を保障して受け入れるためには多くの課題をかかえている。さらには外国籍住民への人種差別はけっして減少していない実態が法務省の調査で明らかに示されている。人口減少で衰退している日本が、それを契機として少数者の人権を尊重する多民族・多文化共生社会となる課題を展望しながら、罪からの解放と和解の福音を託されている教会としての務めをはたしていきたい。—第67回日本キリスト教会大会報告に加筆・修正しました。（こが・きよたか、人権委員会委員長、北海道中会宣教教師）

# 福島原発被災地

## フィールドワーク



石東 岳士

東日本大震災から6年が過ぎた。震災そのものに加え、原発事故という二重の災害に遭遇した福島は、いまだどうなっているのだろうか。風評被害、残存放射線、切り裂かれた人々の絆、幾重にも重なる被災地の苦しみを、どうすれば自分の痛みとして認識することができるのだろうか。「収束」という言葉によって、被災地の痛みが風化させられてはならないという思いから、人権委員会は福島の地でフィールドワークを行うことにした。

2017年6月20日(火)午前9時、人権委員の5名(古賀清敬、小野寺ほさな、金田聖治、森下一彦、石東岳士)はJR福島駅に隣接するホテルのロビーで山崎健一氏(元社会科の高校教員、はらまち9条の会事務局員)、松谷彰夫氏(福島伝道所委員)と待ち合わせ、レンタカーで借りた7人乗りのミニバンに乗り込んだ。二人の話を伺いながら被災地を回るためである。

山崎氏はいつも線量計を持ち歩いている。車を走らせてすぐに線量をチェックした。表示された数値は0.15マイクロシーベルト(毎時)であった。

「シーベルト」という言葉を聞いたとき、記憶のかさぶたがはがれるような感覚をおぼえた。福島市から600km離れた都市に暮らしていると、放射線量の数値を意識することはまずない。放射線量を気にして暮らさなければならぬという事態が異常なのである。国際原子力事象評価尺度におけるレベル7(深刻な事故)の事故は、異常を日常に変えてしまうほどの不条理を生み出しているのである。線量計をチェックするという、その何千回何万回と繰り返されてきたであろうたった一つの所作からも、被災地に暮らす人々の思いが流れ込んでくるようであった。

車は福島西ICから東北自動車道を南下、磐越自動車道に入り、さらに常磐自動車道に乗換え、いわき四倉ICで高速を降りた。いわき市の線量は0.07マイクロシーベルト。福島市の約半分である。両市は原発からの距離はほぼ同じだが、放射線は同心円状に飛散するのではなく、風向きおよび降水に大きく影響する。線量の多い地域は福島第一原子力発電所から北西方向へ細長く伸びてい

るのである。

いわき市からは、太平洋沿いを南北に走る国道6号線を北上することになる。やがて、なだらかな丘陵が美しい広野町に入る。同町に「ふたば未来学園」が2015年4月に開校した。原発事故により双葉郡内の5校(浪江、浪江津島、双葉、双葉翔陽、富岡)が2017年3月に休校となるため、その代わりに避難解除区域の広野町に復興の期待を重ねて新設されたそうである。新たな学び舎が若者の未来を開いてくれることを願いつつ、車はさらに北上する。

楢葉町を過ぎ富岡町に入ると、8つの町村を抱える双葉郡を管轄する双葉警察署がある。その双葉警察署北側にある岡内東児童公園内の一角に、鉄の塊が大切に保管・展示されている。それは津波到達直前に、2人の警察官が海岸付近で避難を呼びかけて回ったパトカーであった。間近で見ると、すべての部分が原形をとどめておらず、いびつに変形している。濁流に飲み込まれ、あらゆる方向からねじ曲げられ、引き剥がされ、切断され、押し潰されたのだろう。その鉄屑と化した車の残骸から、主人を守りきることのできなかった無念の叫びが静かに聞こえてくるようであった。

原発のある大熊町に入ると線量計が「ピーピー」と危険を知らせるアラームを発生始めた。線量計は1.37マイクロシーベルトを指していた。国の定めた除染の基準値は0.23マイクロシーベルトであり、つまりこれが安全な数値というわけだが、それを大幅に上まわっていた。

車はいよいよ大熊町と双葉町の町境まで来た。ここから東に3kmほど走れば福島第一原子力発電所である。山崎氏によると、これまでは国道6号線から発電所に続く道には入ることができなかったそうであるが、今回は、封鎖が解かれていた。どこまで近づけるのか、車を走らせてみることにした。しかし、1.5km地点までやってきたところで、引き返さざるを得なくなった。そこで検問がしかれていたのである。通行する車両はみな通行証のようなものを警備員に提示しており、関係者以外はそれ以上近づることができない。そこでの放射線

量は4.0マイクロシーベルトであった。

放射線を通さない物質は鉛だけであり、車のガラスも鉄板も突き抜けるので窓を開けても開けなくても同じだが、さすがにここで窓を開けてみようという気にならない。検問中の警備員たちはマスクをつけるなど簡単な防護しかしていないようだが、大丈夫なのだろうか。不安な思いを抱きつつ、車をUターンさせてそこを後にする。

福島原子力発電所の北側に隣接する双葉町は現在も放射線量が高く、帰還困難区域に指定されている。6号線から脇道にそれる道はすべてバリケードが施されていて、立ち入ることができず、特に主要な道路には警備員が立っていた。国道6号線と閉鎖中のJR双葉駅をつなぐ道路をまたぐようにして、皮肉にも「原子力明るい未来のエネルギー」との標語が書かれたゲート型の看板がかつて堂々と掲げられていたが、撤去されていた。

福島第一原子力発電所は双葉町と大熊町に跨って建てられており、この原子力発電所の名称は「双葉大熊原子力発電所」となる予定だったそうである。原発の名称は、通例は市町村の名前を取るのだそうで、県名を用いているのは他に島根原発しかない。もし双葉大熊原発という名称だったならば、福島県全体が放射能に汚染されているようなイメージを持たれることはなかっただろう。まさに風評被害である。短絡的に言葉と現実を結びつける愚をおかさないと自らを戒める。

浪江町では太平洋を見渡せる小高い丘に慰霊碑が立っていた。2017年3月11日に除幕式が行われ

たところであった。表側には182人の死者・行方不明者の名が刻まれている。裏側には原発事故による避難のために、不明者捜索を断念せざるを得なかった旨、記載されていた。

南相馬市は原発から20km圏内の小高区、30km圏内の原町、30km圏外の鹿島区が含まれる。便宜上作らざるを得なかったその境界線は、帰還の可否、補償の有無を線引きするもので、目に見えないその境界線は、人と人の絆を分断したのだという。そしてここからは、福島市を目指して西へと向かうことになる。県道12号線に入り、八木沢峠を越えて飯館村に立ち寄った。飯館村は30km圏外であるにもかかわらず、放射線量が高いことで知られる。村の至る所に一袋1トンの汚染土が詰められたフレコンバックが整然と山積みされている風景が印象に残る。飯館村は2017年3月に避難区域指定が解除され、村民の帰還を呼びかけるものの、それに応じる村民はほとんどいない。

今回のスタディツアーでは、二人の協力者を通して、福島のいろいろな声を聞いた。被災地に生きる一人ひとりに声にならない言葉がある。それぞれの立場や価値観の違いによって思惑や利権などがからみあう。そして、何が正しく何がそうでないのか、錯綜した状況がある。ただ、どのような状況の中でも、人からの誉れではなく神の誉れを求める生き方はできるのかもしれない。「彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好んだのである」(ヨハネによる福音書12:43)

(いしづか・たけし、人権委員、夙川教会牧師)

## 楢葉町仮設住宅の 出前カフェに参加して

後藤正昭 (宇都宮松原教会員)

私たちの奉仕は「カトリックさいたま教区」が行う「もみの木カフェ」に協力するもので、2014年に始まった。当初はカトリック教会員の補助だったが、2015年1月から楢葉町仮設住宅群の一つ飯野仮設を、日キとして引き受けてきた。しかし次第に仮設入居者は減少し、2017年3月末には役場・学校が帰還した。それに伴ってカフェの回数も減り、日キの担当はなくなった。

楢葉町は原発事故直後8千人超の全町民が避難者となった。仮設住宅はいわき市内に分散し、自治会と集会所をもつ。飯野仮設は空き家を集会所としている。4畳半の和室ではテーブル2台がや

っとだ。来客より奉仕者の方が多きこともあるが何度か訪問するうちに深刻な状況を理解することができた。

仮設に入るまで8カ所も点々としたこと、親戚にも世話になったこと、受け入れ先は簡単には見つからなかったことなどを具体的に話してくれた。「いやあ役場の職員にはがっかりしたよ、娘と二人、抱き合っ泣いたよね。帰ってくんなっちゅうんだよね。最初から集団で避難してればこんなことになんなかったんだよね」という。人の世話にならないように、と気を遣った結果なのだろう。出来事の一つひとつが辛い思い出に重なって、話し出すといっきに蘇るようだった。帰りたいが復興には程遠い現実をどう受け入れればよいか分からない、という様子がありありと見えた。

この活動で生まれた関係をどのように活かせばよいか問われている。

## 「もみの木」

### ボランティアに関わって

山崎雅代（栃木教会員）

8月22日、栃木教会から4人が「もみの木」の出張カフェに行きました。小名浜林城の仮設住宅（榎葉町の方々）は初めてです。避難指示解除後、他の仮設同様空き家が増えています。集会所に集まる方も減り、この日の出席者は9名。うち2人が今年が誕生日でした。「もみの木」が用意した大きなケーキの白いクリームの上に二人のお名前がチョコで書かれています。ハッピーバースデー〇〇さんと皆でお祝いしました。恥ずかしそうで、嬉しそうでした。私たちは、紙芝居『こねこのしろちゃん』、大型絵本『ちいちゃんの影おくり』、絵本『花咲山』を読みました。「紙芝居は子供が見るもんだと思ってたけど、いいもんだね」と。それぞれのお話が皆の気持ちを一つにしたような気がしました。後、お話を聴きました。「東京の息子の家に3ヶ月、広島の子の家に2年世話になり、ここに落ち着いたんだよ。どこでもよ

くしてもらった。この仮設にも、全国から人が来てくれるんだよ。ありがたいことだ」。震災後の年月、どんなにかご苦労なされたでしょうに。

震災後すぐ、カトリック教会はいわき市に、1階カフェ、2階宿泊施設の丸太小屋風の建物「もみの木サポートステーション」を造り、常駐の奉仕者と、埼玉・群馬・栃木・茨城4県の教会から、3人か4人のチームで、一泊二日か二泊三日で来て、仮設住宅に出張カフェを始めました。栃木教会は2014年から、月一回この働きに加えていただきました。戸数の多い榎葉町の仮設へ日立教会の方々と一緒にお茶のお世話・傾聴の手伝いをしました。2015年からも「毎月来て頂けるなら、日本キリスト教会さんに一カ所お願いしたい」と言われ、宇都宮松原教会と相談し、お受けしました。戸数の少ない飯野仮設へ月交代で訪問しました。参加人数も少ないので、色々話をしてくれました。

「もみの木」も2018年3月でこれまでの活動は辞めるそうです。2011年5月1日発行の震災対策NewsNo.1からNo.24、2016年5月8日発行の震災・内外災害対策ニュースに載っている多くのの方々の様々な働きに比べたら小さな働きです。

#### 緊急支援のお願い（会員となってお支え下さい）

横浜市南区にあるNPO法人 在日外国人教育生活相談センター「信愛塾」が、資金不足で苦境に陥っているという情報が入りました。公的助成金と個人・団体の寄付で賄っていますが、公的助成金が2016年9月で打ち切られたとのこと。

日本で暮らす外国人が急増する中、相談件数は年間800件を超え、内容も複雑化、深刻化しているだけでなく、相談者は生活困窮者が多く、相談料を取ることも出来ないまま「信愛塾」の職員やスタッフは、無償に等しい状態で働いているそうです。

「信愛塾」は1978年から日本に暮らす外国人及び外国に繋がる子の保護者を対象に教育・生活・人権などに関わる相談に常設形・多言語で対応し、具体的な解決を目指すために伴走型の相談・支援を行っています。また、学校や地域社会で緊張を強いられる子どもたちに安全で安心して過ごせる「居場所」を設け、母語による学習支援や日本語指導を行い、学習指導が終わるとゲームやスポーツ、音楽などを楽しみ、ストレス解消に努めています。さらに、在日外国人の問題や多文化・歴史を扱う多言語による書籍、および資料・新聞を集めた文庫を設置して地域にも開放しています。

「信愛塾」は、「子どもの生命、教育権に関わるケースも少なくないので、なんとか従来通りの活動を継続させたい」と願っています。本来、在日外国人の方々が安心して生活できるような状況が整えられれば施設は必要なくなるのですが、現状ではなくすることが出来ません。今求められていることは、このような施設を個人・団体のカンパという安定した収入で支えることです。是非、ご支援下さい。

☆正会員 入会金 3,000円 会費 1,000円（月額）

☆賛助会員 入会金 2,000円 会費 任意の寄付

郵便振込《口座番号》00270-0-7501 《口座名》相談センター・信愛塾